

地方をうつす

河村 雄大

1…「地方」をうつす、「地方」からうつされる、「地方」へうつす

日々の生活のなかで、福岡という「地方都市」に、その中の箱崎という街に、その中の私の家や大学などの場所に暮らしているなかで、私の目にうつるものがある、私の心にうつることがある、また、私の心が目の前の街や場所にうつっていると感ずることがある、はたまた、誰かの、知っている人であれ、知らない人であれ、思いが街や場所にうつっていると感ずることがある、さらにはそのことは、場所、街にうつっていると感ずる私の心にうつっていると感ずることも言える。場所を移す（引越など）といった具体的な行動、行為として、地方、都市、街、場所を「うつす」こともある。地方、街、「場所、土地、都市を理解するとはどういうことだろうか。「理解」とは、私からだけの働きかけ、アプローチによってでは成立し得ない。「響応する」、「うつし合う」、といった相互からのアプローチによって、「理解」のようなもの、が成立し得る。相手は都市・土地・地方といった「空間」、「環境」、であり「概念」である。私は「地方」を理解したい、「地方」に近づきたい。「地方」に住みたいと思っている。「地方」にはなにかある、という期待をずーっと持っている。しかし、いまも福岡という地方都市に住み学部時代は高知に住み、6年間のあいだいわゆる「地方」に生活してきているはずなのだが、「地方」に住んでいる、という実感が無い。臨床心理学者の森岡正芳によれば、「AがBに自らをうつすとき、それはBのうちでAとして現象するのではなく、Bの一部として現象する」、つまりそれは、「単なる私の主観世界を越えて、互いに他者の一部として現象する私」と言えるという。このことは、本稿で試みる、「地方」、「土地」といった、「人ではないなにか」であり、「人でもあるなにか」への、私の、「地方」へのアプローチにも起こりうることだと考える。セラピーの場合、人と人が言葉によって、声によって、対話がなされる。しかし、セラピーの場で、交感を支えるものはそれだけではない。言葉にならないこと、言葉にできないこと、声はまだ生まれていな

い状態であるところの沈黙、あるいは仕草や表情など「言葉」ではない何かしらの「記号」。セラピーの場での「対話」、「うつし」とは、そういうもの、ことによって起こる、起きているようである。このことから、「地方」と「土地」と私の間にもそのような交感、「うつし」が交わされているかもしれないという示唆が受け取られる。

2…〈地方という言葉について〉—固定化された言葉「地方」のイメージ

「地方」と書き（書かれ）、「地方」と言う（言われる）とき、そして、「地方」という言葉を読み、聞いたときに、その、「地方」と書いたり言ったりした人や読み聞きした人、「地方」と言われたり書かれたり読まれたり聞かれたりした土地、場所の中に、「地方」はどのように現れているだろうか。いずれにしてもそのイメージが硬直していないかどうか、固定観念としていつまでも同じ「地方」となったままなのではないか、ということを開く（問いかけられる）ことがなければ、この「地方」という言葉のイメージはその場所、土地の（いま）、（現実）をうつしだしているものとは、あるいは私に「地方」の「本当」をうつすものとは言い難い。本章では、「地方」やそれに類する言葉たち、また、しばしばそれらの言葉たちに対置させて使われる言葉たちの、その固定化された言葉のイメージの検証を試みる。

「地方」「田舎」「辺境」

「地方」や「辺境」は位置を表す言葉であるが、「地方」や「辺境」などの位置に関する「一般的なイメージ」を漠然と伝えるものでもある。「一般的なイメージ」をつたえる言葉であって、個々の、固有の「地方」や「田舎」の「いま」を表す言葉ではない。しかしながら、ひとこと「東京」と、「地方」と、「田舎」、「中心」などと書き、言うだけで、それらの場所の（本当）を表せたと、伝えられたと、その「地方」が「見えた」と思い込む。ひと言で言い表されてしまった、表されたつもりになった、これらの場所、土地、地域は、表現されること、絶えずその場所、土地、地域のいまを

表現されること、その努力を放棄され、あるいは放棄したのではないか。

「何もない」

「何もないでしょう?」。よく、「地方」「田舎」「辺境」に関して使われる言葉ではないだろうか。肯定的にも否定的にも使われる。「何もない」は、なんにもない、ということだけれども、具体的に「何が」ないのか。ただ、「何もない」という形容、概念、使われ方、とある状態の「田舎」や「地方」があつて、そこに対して、内部や外部から「何もない」という言葉が引き出されることについて、そして言葉そのものへの問いをしてみるべきなのではないだろうか。「何が」ないのか。ということを考えることにはどんな意味があるだろうか。何がないのか、そのないものをリストアップすることは可能であろうか。リストアップ出来たとして、そのリストアップされたものを「地方」に作り、持ち、持ち込めば、「何もない」という意識や状態は解決されるだろうか。そしてまた、当たり前のように対置せられる「東京」がある。先の「何もないでしょう?」は、「東京と自分の土地を比べ」ることから発していた。東京にもいろいろある。「銀座」があり「新宿」があり「月島」があり「渋谷」があり、というように。「大」東京というものは外からしか見えない。外のものだけがそう見る。「大」東京は実態ではないのかもしれない。東京には「何でもある」というイメージなどというのは、外のものが感覚的に作り上げたイメージ、東京自身が外に向けてのみ作り上げたイメージ、なのではないか。

3…地方を〈映す〉—コンプレックス、偏見を感じとる

それにしても、これまでの意識、従来のような「地方と中央」や「都市と農村」といったような対立の構図からなかなか抜け出せていないように思う。私は何とかこのような考え方から抜け出したいと願う。そもそも、「地方」と「東京」を比較したりする思考をなぜしているのか。なぜその地方のことに関して東京が出てくるのか。出てこなければならぬという法でもあるわけでもなく。東京出身者である私が何らかの差別意識あるいは勘違い、思い込み、といったことをしているのではないだろうか。そのような私の意識はどこから生み出されているのだろうか。本章では、感覚、意識の面から、たとえて言うならば私のところに映る、「地方」のコンプレックスを思考する。

地方の「コンプレックス」

東京からいいものが来た、東京からはいいものが来

る、東京にあこがれる、それでいて「地方の独自性」も求める、それが「地方」のコンプレックスの根っこにあるのではないかと考える。「地方」のコンプレックスは「中央」に対してある。「中央」を志向しつつ「地方」の自尊心を保つこと。「どこを訪れても代わり映えのしない地方」というような言葉はよく言われる。果たして、そう言われた「地方」は、「代わり映え」すべきなのだろうか。「代わり映え」、つまり「地方」のバリエーションをたくさん見たい、という旅行者、あるいはその「地方」の者ではない人間の、あるいはもっと大きな媒体や政治や経済が「地方」に対して植えていく強迫観念なのではないだろうか。「代わり映え」をもとめる、それらの者(私も含めて)は、「よそ者」として無責任なことを言う。まず、地方をなぜ「地方」というのか、なぜ地方と東京を対比するのか、というところを考えたい。地理的な遠さ、文化の模倣、後追いというヒエラルキーや順位と思えるもの、地方と東京の間にそのようなものが本当にあるのか。地方出身者(生活者)には本当に東京コンプレックスのようなものが有るのだろうか。

「地方と中央」

ある地域(国)にいくつかの「地方」があつて、その中でも商業的に栄えているところ、あるいは信仰の何かしらの力、場所を持つ「地方」は、その地域(国)における「中央」となりうる。しかし「地方」は、いくつもの地域の「中央」を含む、もっと広域的な地域(国)の中では、「中央」になることは多分ない。地方にとって対立、対比、対置せられるものは「地方」、そして「中央」である。「中央」はどうか。「中央」はおそらく「中央」とのみ対立、対比、対置する。それも「地方の中央」(たとえば福岡市)と「中央の中央」(たとえば東京)が対立、対比、対置せられる。しかしまた、「地方の中央」は「中央の中央」に対して対立し、対比し、対置していると考え、中央の中央は「地方の中央」の考える地域カテゴリー、広さで自らを「中央」として捉えるとともに、さらに広い地域カテゴリー、「中央の中央」が「地方の中央」として認識されるような地域カテゴリーにおいて「中央」を見ようとする。そしてそのようなさらに広い地域カテゴリーにいなながらも、自らが、別のもっと地理的にせまいカテゴリーの中では「中央」である、という意識は捨ててはいない。ある地域カテゴリーの「中央」に「あり」、かつ、さらに広い地域カテゴリーの「地方」に「ある」。あるいは「中央」に「なり」、地方に「なる」のか。そこに「ある」ことと、それに「なる」こと、その差異

を明らかにすることにはなにか意味があるだろうか。そこに「ある」こと、地理的に、東京という「中央」から見て、見られて、遠くにあること、「地方」にあること、「辺境」にあるということ、といった、「地方」が地理的にどこにあるか、というような、「知識」に属することである。「地方」の「新たな主体の姿が呼び起こされる瞬間」、黙ったままみじんともしなかつた「地方」が「ふと動き出す瞬間」、ふと「地方」の生活の姿が見えて、「ぬくもりを感じられるような瞬間」、私はそのような瞬間に出会いたいと思う。

地方に対する「私」のコンプレックス

東京出身者である私の場合、「地方」に対して夢想、「中央」に対しては偏見をもっているという自覚がある。「地方」に対しては「田舎はいい」「地方はいい」と言う「居住」していない者の楽天的な、他人事のような見かたである。東京にはうんざりさせられている。就職活動中、福岡市のハローワークへ就職相談に行った時に、ハローワークの職員から「東京に帰りなさい」と言われた。「こっちは仕事はない」とも。どこに行ってもいても東京、東京と言われ、意識させられているような気がする。それが中央、東京に対する私のコンプレックスであろう。そして、「東京」が嫌で「地方」に行きたいと願う私はまた、どこへ行っても「よそ者」である。そのために高知や福岡といったいわゆる「地方」に住んできたはずの今も、「本当には住んでいない」と、思い知らされる。

4…地方を〈写す〉—写真を撮る、収集する、整理する

本章では、「地方（街、場所、土地）」を写真に撮り、撮り「集めた」写真の整理をし、結果としてその写真たちの中に「地方」がどのようにうつり、その写真たちの集合として表されているものはなにか、私自身は写真を撮るなかで「地方（街など）」の「なに」に気づき、触れ、集め、集めた写真たちを街の「なに」と感じているのか、を読み解いていく過程を記述する。

写真による「地方の瞬間」の収集

撮りはじめる段階では、何を撮る、と決めることなく、あとから撮ったものを見直す。あるつながりや、こればっかり撮っている、といったものが見えてくることもある。それは、その「まち」や自分と両方に関わる「何か切り離せないもの」なのかもしれない。「写真による収集」とはなにを何をしていることなのか。写真を撮ること、撮った写真を整理してみること、写されたもの、ことに何らかの分類、傾向、場面が見えてくると考える。ここで収集されたものは、主にふと

した瞬間の風景である。そこには、被写体とともに自分の「感じ」も収められる、あるいは、収められてしまっているのではないだろうか。そして、その写真たちに写っている、その写真たちを構成する様々な要素、イメージには、「地方」のある瞬間に反応した「私」、「私」に反応させた「地方」のある瞬間が写しこまれていると考えられないだろうか。

箱崎での生活から

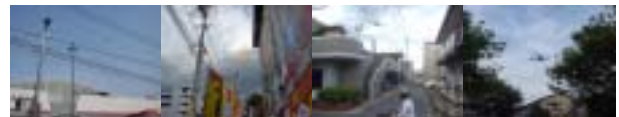
私の場合、箱崎の街の中では、たとえば学校の屋上、飛行機、箱崎浜、国道三号線、空（雲）、きんしゃい通り、マンションなどの場所や、ものをよく写している。また学校の屋上やきんしゃい通り、箱崎浜は、よく写真を撮る場所でもある。本節においては、この、箱崎での生活から私が写した街、私に写された街の写真を、撮り、収集し、整理するという過程と、それに伴う思考の過程を記述する。

うつすプロセスA：箱崎の風景・マンション



マンションは夕日を映し返す「スクリーン」である。都市における夕暮れの質がみえてくる。

うつすプロセスB：箱崎の飛行機



飛行機は、箱崎に一瞬の風景を作り出す。一瞬の風景は一日のうちに何度も繰り返される。

うつすプロセスC：「箱崎」という文字の表出



箱崎の中で、さまざまな場所が「箱崎」と、さまざまな表記の仕方でも「箱崎」を使って名乗っていること。

うつすプロセスD：

「元気バイ！！ふくおかキャンペーン¹¹⁾」



「元気君」が街にのり移ることでうつしだされた、違和感のような、異次元に連れて行かれるような、福岡の一瞬の間違いのような風景。

5…地方を〈うつす〉—行動の結果から

以上を書いてきたことは、私の、「地方」をわかりたいという思考と、結果的に図らずも地方をうつしてい

るのではないかという行動のプロセスを書き連ねたものである。これらのことは、特に大義名分、目的、理由もなく私がやってきたことである。しかし続けていくことで、継続してやり続けることで、何がしかの「意味」、「結果」が文字通り、結果的に浮かび上がってくるのではないかと考えていた。何がしかの意味は、いまだみえた、わかったとは思えない。しかし、いくらかの可能性や「地方」の見方などが、自分としては、見出せているように思う。

□ I 写真の質（本稿における）

第4章の「プロセス」で示した写真は、たとえばプロセスDは、一瞬出現した、街の、場所の、衝動であり、その衝動が私の心にうつされ、写真を撮った。プロセスBは、街の日常の中にいつもあるもの、いつも通り過ぎていくものと、何度も繰り返されてきた一瞬の邂逅に、飛行機に、飛行機が上空を飛ぶ街の風景に、私の目や耳が吸い寄せられる、「吸い込まれる」という感覚が繰り返されてきたものである。私（の心）に現れ、映される「写真を撮ったときの私の気分」「写真を撮ったときの街の気分」というのが、本稿における「写真」の質である。

□ II うつつすことによる「地方」への接近

写真を撮ること、写真に写ったもの、風景を収集し、整理すること。無意識から意識へと整理する作業のなかで徐々に私に映し出される「地方」に向き合うこと。それによって私は私にとってかけがえのない「地方」を、手に入れたい、というとおこがましいが手に入れたい。映像を撮ることによって、「地方」の、「街」の、さまざまな断片を写し、あつめること、それは、「地方」や「街」の記録でもなく記憶でもなく、私にうつされた「感覚の記憶」をもたらすものであるというふうに思う。私の「感覚の記憶」となった映像プリントとしてうつっているものたちは断片化され、細分化された「地方」「街」である。個々にうつっている「感覚の記憶」は、「地方」や「街」の断片は、その個々の住む、居る、ところと相似する。何らかのそこ—「地方」「街」を描く。「私」や「都市」や「地方」は「うつつす」という作業によって、切り刻み切り刻まれて細分化し断片が全体になり、その断片によって、地方や都市がそのものとして私に映されるというふうに考える。私にとって「地方」や「街」というのは、たとえどんなに小さなものでも、大きすぎる。だから「地方」や「街」の断片、細分化した、一瞬であり、小さな片隅であるそこから「地方」、「街」といったものに近づいていける。「地方」へのまなざしを固定化することなく、「地

方」の意味を移しながら、「地方」の「いま」を誠実に自分の中に映すこと。「地方」を「理解」するのではなく、「地方」が私に「うつる」ということ。それによって「地方」への接近が果たされる。

6…地方を移す—「むすび」にかえて

先日、岡山は美作地方の中国山地の中にある町の農協への就職が決まった。この一年間でもらえた唯一の内定である。今回内定をもらったこの農協へ試験を受けに二度、この町へ行った。一度目に行ったときに、近所にある、いまは使われてない古い小学校の校舎—来年で築百年だそうである—を見かけ、寄った。日中は建物内が開放されていて、自由に入ることができるようになっていいる。使われていた当時のままに並べられた机やいすに坐ったり、教室の隅にある足踏みオルガンや、講堂においてあるピアノを弾いてみたりしながら、素敵な場所だな、と思い、つぎにまた来れることがあったら、ビデオに撮ろうと思った。一週間後、二次面接の通知がもらえて、再びこの町に来ることができた。この町に住むことが決まっていま、私はあの小学校をビデオカメラで撮っているときに何を思っていたのだろう、どんな未来を想像していたのだろう、と考える。撮影しているときに、近い将来この町に住むことになるかもしれない、などと思っていたらどうか。今回もまた縁のないかもしれない就職活動先の、旅先の、よそ者としての、素敵な場所、ということで撮影していた、というのがあのとときの感じに近いかもしれない。福岡に帰ってから、その映像を見返していたときの感じも、それとあまりかわらないように思う。旅先の映像、である。その数日後に採用内定通知が来た。あの町に住むことが決まっていま、あの時に撮った小学校の映像をみると、そこには、もうすぐ私が住む町が映っている。そして今年の四月には実際にもう住んでいるのである。そしてまたいつかは、そこを去った者の目としてみることもあるかもしれない。映像を撮っている「いま」というべきか、映像を撮っていた「いま」というべきか、その映像を撮ったという経験から、その映像を撮ったとき、見たときの私がなにかという既定と未定の立ち位置から、その場所と映像と私の現在と過去と未来が一挙にうつしだされたように感じた。これが「うつつす」ことである。

ⁱ 森岡正芳『うつつ 臨床の詩学』みすず書房 2005、p20

ⁱⁱ 「元気バイ！ふくおかキャンペーン」…2005年3月に起きた福岡県西方沖地震を乗り越えていこうと県内に向かって呼びかけると同時に元気なまち福岡を全国に向けてアピールしようというキャンペーン。2005年4月下旬からゴールデンウィークの終わりまでの期間に行われた。「元気君」はそのマスコット。「福岡県西方沖地震 元気バイ！！キャンペーン実施報告書」より参照。